

週日の説教

金 大烈 神父 2011年10月8日(土)

《母の愛 ～子どもために、絶え間なく祈りましょう～》

今日の福音(ルカ 11・27 - 28)の最後にイエス様がおっしゃった言葉は、どこかで似ている言葉を聞いたような気がしませんか。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」とおっしゃいますね。似ている箇所を思い出しませんか。イエス様が人々に話している時に、ある人が来て、「門の外にお母さんと兄弟達が待っています。」と言うと「わたしの母とはだれか。私の兄弟とはだれか。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」(マタイ 12・48 - 50)とおっしゃったという話があります。それと全く同じ内容です。つまり、「神の言葉を聞いて従おうとする人々が私の母、兄弟であり、その人々は幸いな人である。」ということになります。

今日の福音には、イエス様がカリスマ性を持って、人々から称賛を受ける姿を見た一人の女の人が出てきます。そのようなイエス様の素晴らしい言葉、抵抗できないような力を持つ姿を見て感動したのでしょうか。そして、「あなたのお母さんはどのくらい幸せな方なんでしょうか。」と言います。これは、30歳代から50歳代くらいの年齢のお母さん達によく表れる心の働きです。自分の子どもが立派になれば誰かに見せて褒められたい。しかし、近所の家の同じような年齢の誰かが東大を卒業して、立派な職業につき、社会的にも認められているという話が聞こえればお腹が痛くなるのです。これは全てのお母さん達が自然に感じることだと思います。

今日の福音の女性は、聖書には「ある女」と書かれているだけですが、きっとイエス様と同じ年齢の息子がいるお母さんだったのでしょうか。そして、イエス様が立派に何かをする姿を見て感動するとともにうらやましくもあったのでしょうか。だから、半分はねたむ気持ち、半分はうらやましい気持ちになって「なんと幸いなことでしょうか、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」と言ったのだと思います。

しかし、よく考えてみれば、マリア様は幸せな方でしょうか。私ならば、何百億円をあげると言われても、マリア様のようなお母さんの役割はしたくありません。マリア様は、絶対に人間的には幸せな方ではありませんでした。しかし、2000年という時代が経っても私たちはマリア様を母として尊敬し、その取り次ぎを求めています。

今日の福音を通して、私たちは本当に何を幸せと思うべきなんでしょうか。もし皆様の家に、自分の期待通りになってくれない息子や娘がいたら、そのために心が痛むのは当然なことです。そして、隣の家の同じ年代の子どもが社会的に立派な評価を受けていれば、その時、皆様の心はどうあるべきなんでしょうか。いつも信仰の目で見ようとしてください。自分がお腹を痛めて産んだ子どもを、もしかしたら神様の方がもっと大事にしているかもしれません。しかし、神様がくださったお母さんの役目は、この世の誰よりも子どもを真まことに正しく愛することです。それについては、神様にも負けて

はいけないのです。それなのに、誰よりも愛さなければいけない立場のお母さんが、自分の欲のために、誰よりも深い傷を子どもにつけてしまう場合も結構あります。自分のつまらない欲のために、子どもを馬鹿にしてしまう場合も結構あるのです。

皆様、今日の福音を通してもう一回考えてみましょう。この世の中で一番難しいことは、子どもを育てることだと思います。子どもが子どもらしく、本当に自由に、この世を愛しながら生きるために、その灯台となれるのは親の愛でしょう。特に母の愛です。正しく母に愛された子どもは健康です。親が正しい愛だと錯覚して、実際には正しい愛をもらえなかった子どもは、必ずゆがんでいます。それらをよく考えて、今日皆様をお願いしたいことは、子どものために何よりも絶え間なく祈ってほしいということです。それが一番大事なことです。そしてその祈りによって、一番望ましい愛の表現ができるのです。

お母さんならば、子どもは死ぬときまで十字架です。その十字架を投げよう、捨てようとする気持からは解放されなければいけません。それは十字架であると共に、一番素晴らしい、人間に可能な一番美しい宝物だと思います。

ありがとうございました。